

美術の窓 (160)

江戸時代の富士山の見え方

大和文華館館長 浅野秀剛

私は富士山に登ったことがない。そんな私が河村岷雪(?~ 1777)の代表作『百富士』(1771年刊)の研究を始めたのは一昨年の11月頃だったと思う。論文を書き終えたのが今年の2月末なので、完成までに1年以上かかったことになる。美術の窓(155)にも『百富士』について書いたが、それは研究を始めたころのもの。この小文は完結に当たってのこぼれ話である。

『百富士』は、岷雪描く102の富士山図に賛を添えた絵本である。富士山図はほとんどが岷雪による実体験、スケッチを元に制作されたと推定できるものであるが、なかには、こんなところから見えるの?というもまで含まれている。岷雪が自身のスケッチを元に描いた可能性が高い図のうち、最も遠方の「牛堀 常州」「朝熊山 勢州」「愛宕山 山城」「銚子浦外川 下総」を検討してみよう。

まずは常州牛堀。牛堀は茨城県霞ヶ浦の東側の地で、現在は潮来市に含まれる。「常州牛堀」の図といえば、葛飾北斎「富嶽三十六景 常州牛堀」を思い起こす人も多いと思う。「常州牛堀」をネットで検索すると、ウィキペディアに「富嶽三十六景 常州牛堀」の項があるのには少し驚いた。北斎の図が、岷雪の『百富士』にヒントを得ていることは今や私たちの常識であるが、それが正しく記されていることに少しホッとした。『百富士』の「牛堀 常

州」(図1)には松月庵遊之の句が載っている。遊之は常陸小川住の俳人で、俳書『春の首途』(1776年刊)の編者である。その書に岷雪は句と挿図を寄せているので、俳諧仲間であったことは疑いない。したがって、かつて岷雪が小川の遊之を訪ね、その前後に牛堀に寄った折に「牛堀」の下図が成ったのではないか、ということが容易に想像される。

伊勢の朝熊山は、江戸時代から富士見の人気スポットとして知られていたようだ。明和3年(1766)刊『伊勢参宮細見大全』の朝熊山「勝峰山金剛証寺」の項に「奥院呑海庵是より眺望絶景也。近く二見に臨み遠く富士山を望む。」とあり、寛政9年(1797)刊『伊勢参宮名所図会』巻5の「朝熊奥呑海庵 富士見台」に「又ある時はときしらぬ山もいとあざやかに見え待りしき心も言も及ばね」と記されている。『伊勢参宮細見大全』には「朝熊山 勢州」(図2)と近似するので、岷雪は現地へは行かずに作画した可能性もあるかもしれない。

京都の西北の愛宕山は悩ましい。東北の比叡山と並んで、京都では古来より名高い山であるが、現在の専門家によると、愛宕山や比叡山から富士山は見えないという。愛宕山から富士山が見えるという伝承があったかどうかは悩ましいが、『東海道名所図会』

の巻一「四明嶽」の項に「秋の日、雲消し天外蒼々たる時には駿河の富士山此峰より見ゆる也。百富士という書に京師の愛宕山より富士峰見ゆるの図あり。」と記されている。俳諧書『狂歌富士賛』にも、愛宕山から土器投げをする旅人と茶屋女の図があり、遠くに富士山も描かれ、「くもりなげもない愛宕には、日はかはらけ程と見るふじの山」という狂歌も添えられている。『百富士』の「愛宕山 山城」(図3)に付された葛飾素丸(1712~95)の句「雲に入る土器か鳥か富士の嶺も、愛宕山の土器投げが詠みこまれているので、愛宕山の景観を詠んだものとしてよい。『東海道名所図会』や『狂歌富士賛』の愛宕山から富士山が見えるというイメージが、『百富士』に全面的に依拠したものという可能性はあるが、愛宕山から富士山が見えるという伝承が存在し、岷雪がそれを元に作画したと考えておきたい。

残るは千葉県銚子の外川港である。銚子は富士山が見える東端のスポットだという。私は前の職場が千葉市美術館であり、そこには専門の浮世絵の文献が豊富にあるので、今でも毎年お世話になっている。だから、銚子にも何となく親近感があり、『百富士』の「銚子浦外川 下総」(図4)と、歌川広重画「六十余州名所図会 下総 銚子の浜外浦」(大判錦絵、1853年、図5)がよく似ていることもあり、現地調査をすることにした。挙行日は昨年(2021)の12月20日。銚子電鉄の外川で降り、海岸の千騎ヶ岩や犬岩はもちろん、地球の丸く見える丘展望館までくまなく歩き、どのように富士山が見えるかをチェックした

つもりであったが(因みにその日は晴れていたが富士山は見えなかった)、甘かった。スケッチをそのまま版下にしたような「銚子浦外川」図なので、そのように見えるスポットがあるかどうかの詰めが甘かったのだ。そこで今年の1月12日に实地再調査(その日も晴れていたが富士山は見えなかった)をした。その結果、一つのスケッチを元に版下を作成したとするのは無理があるという結論になった。図の中央の岩は、千騎ヶ岩で、穴が特徴的な大岩である。右側からせり出しているのが屏風ヶ浦で、房総半島越しに富士山を見た情景である。千騎ヶ岩の穴が見えるのは、ほぼ真北と真東からであり、全体の位置関係から北側の少し高い位置から南の方向に海岸を眺めた景観であることに紛れはない。となると、屏風ヶ浦の先端はほぼ真西、そしてそのすぐ左に小さく富士山が見えるということになる。岷雪が、それら全部を見わたせる好位置に立って写生をしたと仮定した場合(今は家屋などが建て込んでいて絶妙な場所を見出すことはできなかった)、眼前の百八十度の光景を一図に収めたことになる。しかも富士山を左にずらして大きく描き、千騎ヶ岩の右にある犬岩を省いて。というふうを検討すると、「銚子浦外川」の版下絵を描くに際し、岷雪は、複数のスケッチをもとに頭で構図をまとめて一図にしたと推定できる。

旅にはいろいろな形があるが、江戸時代と現代を行き来する旅もなかなか面白いと思いませんか。

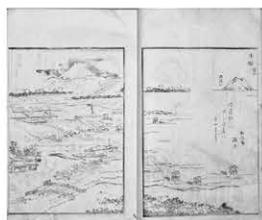


図1 山梨県立博物館蔵



図2 山梨県立博物館蔵

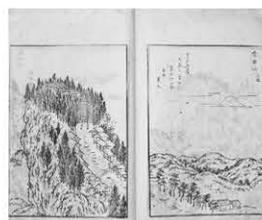


図3 山梨県立博物館蔵

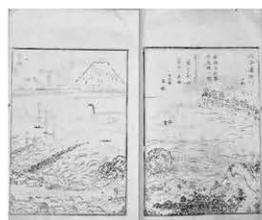


図4 山梨県立博物館蔵



図5 「広重 六十余州名所図会」(岩波書店、1996年)より複写

季刊 美のたより No.218

令和4年4月1日

発行 大和文華館